

中学校初期段階での学習意欲を高める授業づくり

— 外国語活動の経験をいかして —

森住 貴子¹

グローバル化が急速に進展する今日、子どもたちが積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲は今後さらに重要になる。小学校で外国語活動を経験した生徒の学習意欲を中学校でも維持し、さらに高めることが求められている。そこで、生徒が段階的な支援を受けながら、外国語活動の経験をいかし、達成感や成功体験を得ることで学習意欲が一層高まると考え、研究を行った。

はじめに

『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語編』(以下、『解説』という)には、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」(文部科学省 2017 p. 5)と、生涯にわたって外国語でコミュニケーションを図ろうとする意欲がさらに重要になっていると示されている。

また、ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査2014」には、中高生は将来の社会の中で英語の必要性を感じており、とりわけ中学生の95.1%が日常会話や海外旅行で困らないくらいの英語力もしくはそれ以上の英語力を身に付けたいと感じているという結果が出ている。しかし、同調査では、英語を苦手と感じる時期は、中学1年生で最初のピークを迎えることも分かる。

さらに、『解説』には「学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校間での接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている」(文部科学省 2017 p. 6)とも示されており、小学校における学習との接続が不十分であることが分かる。

以上のことから、小・中学校の学習の接続に課題があると判断し、小学校での外国語活動を発展的にいかし、学習意欲を高める授業について研究を行った。

研究の目的

本研究の目的は、生徒が段階的な支援を受けなが

ら、外国語活動の経験をいかし、達成感や成功体験を得ることにつながる授業を行うことで、生徒の学習意欲を高めることである。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 学習意欲

所属校学区の小学校で外国語活動を担当していた経験の中で、外国語活動に意欲的に取り組んでいた児童が中学校に進学し、英語学習において意欲を無くしていく姿を見ることがあった。このことから、現状把握のため所属校1年生3学級の生徒にアンケート調査を行った。「英語の授業に意欲的に取り組んでいますか」という質問項目に対し「どちらかと言えばそう思わない」、「そう思わない」と答えた生徒が16%いた。その理由として「難しい」、「できない」、「楽しくない」と記述していた。

学習意欲について「最新 学習指導用語事典」(辰野 2005)には、「学びたいとか、学ばなければならないというような気持ちである」と定義されている。これを基に、所属校の現状から「学びたいという気持ち」に焦点を当て、学習意欲が高い状態とは「英語ができるようになりたい」「英語を使ってみたい」、「がんばりたい」という気持ちが高い状態とし、これらの状態を目指し、授業実践に取り組んだ。

(2) 達成感や成功体験

アメリカの心理学者ホワイトによって提唱された「有能感」という概念は、「環境に積極的にはたらきかけ、自分にとって効果的な変化を生じさせようとする能力、その際に感じられる満足感、およびそれをさらに求めていこうとする傾向」を意味するものである。学校生活において、学習についての「有能感」は、その学習に関する成功体験や肯定的評価で発達し、失敗体験や否定的評価で阻害されると考えられる。

そこで、生徒が達成感や成功体験をより多く得る

1 愛川町立愛川中原中学校
研究分野(授業改善推進研究 外国語(英語))

ことができれば「有能感」を感じ、その結果学習意欲を高めることにつながるのではないかと考えた。

(3) 段階的な支援

『解説』は、「生徒が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導をすることが大切である」(文部科学省 2017 p.15)と述べている。このことから教員が単元目標を達成した姿を事前に示し、英語が苦手と感じている生徒でも取り組める外国語活動をいかした活動から始め、生徒の不安感に配慮した段階的な支援を行えば、生徒が達成感や成功体験を得ることができるのではないかと考えた。

(4) 外国語活動の経験をいかすこと

『解説』には、「中学校第1学年においては、特に、小学校における外国語活動や外国語科の内容、指導等の実態や生徒の興味・関心等を十分に踏まえるとともに、生徒が在籍していた小学校において、どのような時間割編成、指導体制によって授業が行われているかを把握することにより、中学校への円滑な接続を図ることが必要である」(文部科学省 2017 p.85)と示されている。中学校教員が小学校での学習指導状況を把握し、小学校の学びを中学校の学びにつなげていくことが重要であると言える。

しかし、愛川町の中学校外国語科教員へのインタビュー調査を行ったところ、中学校教員が小学校の学習状況を把握して指導計画を立て、授業実践しているとは言い難い現状があることが分かった。

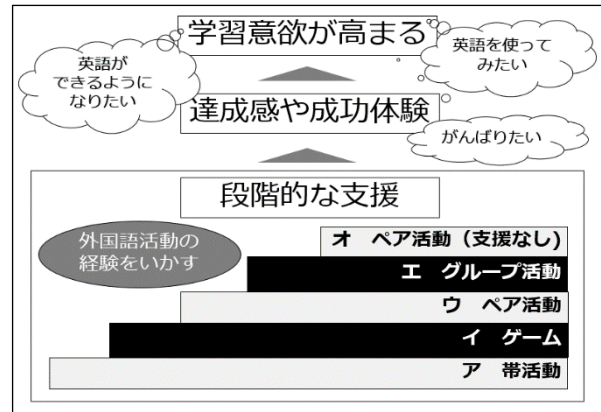
前述の所属校におけるアンケート調査では「外国語活動の経験が役に立っていますか」という質問項目に対し、「どちらかと言えばそう思わない」、「そう思わない」と答えた生徒は28%おり、その理由として「小学校のことを繰り返しているだけ」や「小学校で学習したことがあまり出てこないから」を挙げている。生徒は外国語活動で学んだことを中学校の英語の授業でいかすことができなかつたり、一から新しいことを学んでいるかのように感じたりしていることがうかがえる。そのため生徒は英語の授業で戸惑いを感じ、「できない」、「楽しくない」という気持ちを抱き、学習意欲の低下につながっていると考えられる。

このようなことから本研究では、生徒が小学校の学びを中学校の学びにつなげられるよう授業改善に取り組むこととした。

2 研究の仮説

本研究では、「生徒が段階的な支援を受けながら、外国語活動の経験をいかし、達成感や成功体験を得ることで、学習意欲が高まる」と仮説を設定し、構想

を立てた(第1図)。



第1図 生徒の学習意欲を高めるための構想

3 検証方法

検証授業を実施し、次の2点で分析・考察を行った。

(1) アンケートの結果及び記述内容

検証授業実施クラスを対象に授業前と授業後でアンケート調査(4件法)(以下、事前アンケート、事後アンケートという)を実施し、単元の学習後における意識の変容を分析・考察した。

(2) ワークシートの自己評価と記述内容

授業後に回収したワークシートの自己評価から授業ごとに目標到達までの手立てを実行できたかどうか、及び記述(単元後の振り返り)から段階的な支援が効果的であるか、生徒が達成感や成功体験を得て有能感を高められたか、学習意欲を高められたかについて分析・考察した。

4 検証授業

(1) 概要

【実施期間】	令和元年10月7日(月)~10日(木)
【対象】	所属校 1学年3学級(100名)
【授業時数】	3時間
【単元】	Let's Talk④ 買い物をしよう
【単元目標】	・今まで学習した表現を使って買い物を する ・ペアワークなどで間違いを恐れずに 買い物のやり取りをする ・買い物をするときの表現を理解する

(2) ワークシートについて(第2図)

ア 到達目標の提示

教員のデモンストレーションにより、単元の到達目標を提示し、生徒に目標を達成した姿のイメージを持たせた。

イ 目標到達までの手立て

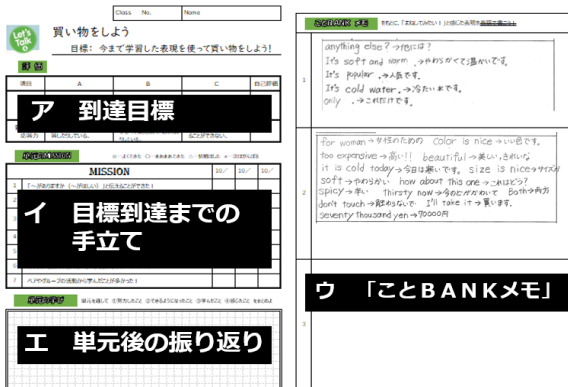
生徒が学習に見通しを持てるように、目標到達までの手立てを示し、毎時間自己評価をさせることで、段階的に達成感を得られるようにした。

ウ 「ことBANKメモ」

メモ用紙を配付し、教員のデモンストレーション、ペアやグループ活動の中で使ってみたいと感じた表現を記入させた。さらにそのメモ用紙をもとに辞書や教科書を活用し、ワークシート内の「ことBANKメモ」と名付けた欄に清書させ、次の時間に活用させた。

エ 単元の振り返り

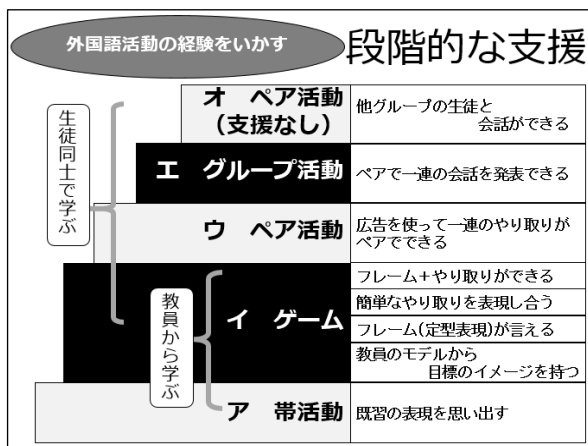
単元後に、振り返りの時間を設け、単元を通して努力したこと、できるようになったこと、学んだこと、感じたことを記述させた。



第2図 ワークシート

(3) 学習活動

第1図の構想に基づき、段階的な支援として、次のア～オの5つの活動を3時間の授業に組み込んだ(第3図)、(第1表)。



第3図 段階的な支援

第1表 単元の活動計画

第1時	ア 帯活動 イ メリーゴーランドゲーム
第2時	ア 帯活動 イ メリーゴーランドゲーム ウ ペア活動 (会話練習)
第3時	ア 帯活動 エ グループ内での発表 (フィードバック) オ ペア活動 (支援なし)

5つの活動については次のとおりである。

ア 帯活動

検証授業に先立ち、帯活動としてチャンツとインプット活動を行ってきた。チャンツは外国語活動で生徒たちに親しみのある、リズムを用いた表現活動である。本単元では外国語活動で扱ったものよりさらに発展させ、ある程度まとまりのある買い物のやり取りを定着させることを目的として活用した。

インプット活動では、ペアで買い物のやり取りで使用する表現活動を行い、外国語活動で親しんだ表現や単語、外国語活動で扱った絵カードの挿絵を使用するなどして、生徒に安心感を持たせる工夫をした。

イ ゲーム

本単元では、外国語活動で経験のあるメリーゴーランドゲームを発展させた活動を行った。メリーゴーランドゲームは、4人グループで行う。カードを引いた生徒がそのカードについて次の生徒に質問をし、質問された生徒が答えるという活動である。外国語活動では、「What sport do you like?」、「I like (tennis).」というやり取りを定着させる場合などに活用した。

今回は、絵カードの裏面に値段を記載し、会話のバリエーションが増えるように工夫した。ゲームを通じ、「店に自分の欲しい品物があるかどうかのやり取り」(第2表)「品物の値段を問答するやり取り」(第3表)など、買い物の定型文を定着させることを目的とした。

第2表 ゲーム part 1

客: Do you have any bags?
店員: Yes, we do.

第3表 ゲーム part 2

客: How much is it?
店員: It's (750) yen.

また、自分が店員であるなら商品をどのように薦めるか絵カードを見て考え、自由に表現させることとした(第4表)。

第4表 ゲーム part 3

店員: How about this? (店員がお薦めするなどのやり取り)
客: OK. I'll take it. / No, thank you.

例えば、熊のキャラクターのバッグを売りたいとした場合、グループ内のやり取りでヒントを得ながら、「The bear is cute.」等の表現を用いたり、また別の生徒がそのカードを見て「The bear is popular.」と客に薦めたりする。周りの生徒が「なるほど」と感じた文や語句を「ことBANKメモ」に記入するなどして、生徒同士が表現力を高め合うことをねらいとした。

2つの定型文(第2表)、(第3表)の定着と自分の

表現を考える場面(第4表)を重ね合わせることで、買い物のやり取りの枠を生徒たちは理解し、次のペア活動にいかせるようにした(第5表)。

第5表 ゲーム part4

客: Do you have any bags?
店員: Yes, we do.
店員: How about this? (店員がお薦めするなどのやり取り)
客: OK. I'll take it. / No, thank you.
客: How much is it?
店員: It's 750 yen.

ウ ペア活動

服飾品店、ファストフード店の広告のテンプレートを配付した。生徒は好きな店を選び、売りたい品物を実際の広告から切り貼りしたり、自分で品物の絵を描いたりして広告を完成させ、値段を付けた。店員役の生徒には「ここが素晴らしいから買ってほしい」という気持ちを持たせ、どのように表現したら客役の生徒に伝わるかを考えさせた。

完成した広告を活用し、ペアで買い物のやり取りを練習させ、次のグループ活動に備えさせた。ペアで十分練習させた後にグループ内での発表とすることで、生徒の不安感が軽減されるようにした。

エ グループ活動

6人グループ内でペアの発表を順次行わせ、店員役、客役を交代で行わせた。発表ペア以外の4人は、ペアが困っていたらアドバイスをし、参考となる表現は「ことBANKメモ」に記入させるようにした。

ア～エの活動で十分練習を行った後、他グループの生徒とやり取りを行わせた。初めて買い物のやり取りの相手をする生徒から新たな表現を吸収し、会話が成り立つ体験を通して達成感を得られるようにした。

5 結果の分析と考察

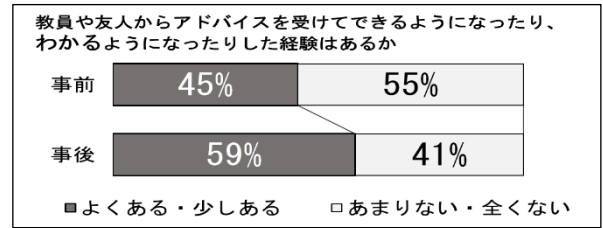
仮説に基づき、段階的な支援が効果的に行われたか、達成感や成功体験が得られ有能感を高められたか、そして生徒の学習意欲を高められたかの3点について検証した。

(1) 段階的な支援が効果的に行われたか

段階的な支援についてはアンケート調査による意識の変容とワークシートの記述(単元の振り返り)から検証した。

事前アンケートでは、「先生や友達からのアドバイスを受けてできるようになったり、わかるようになったりした経験はありますか」という項目について、「よくある」、「少しある」と回答した生徒は45%であったが、事後アンケートでは「よくある」、「少し

ある」と回答した生徒は59%と14ポイント増加した(第4図)。



第4図 アンケート調査の結果① (N=88)

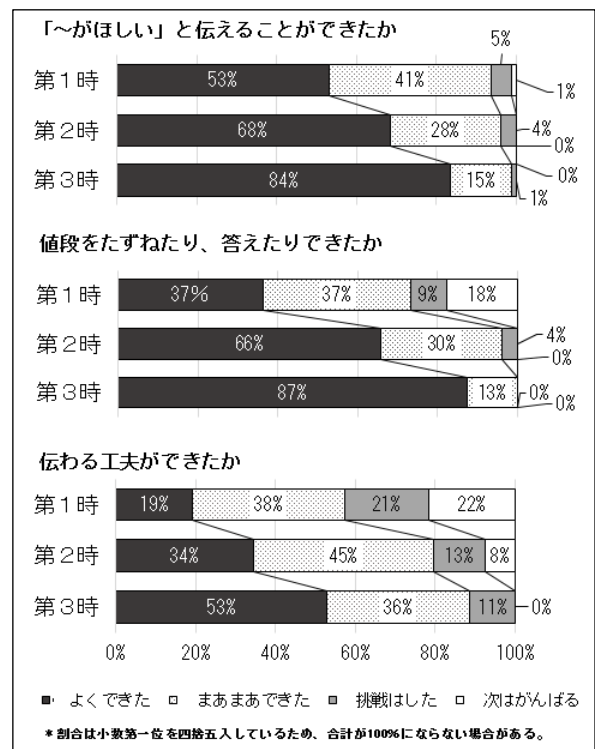
ワークシート(単元後の振り返り)では次のような記述が見られた(第6表)。

第6表 ワークシートの記述

ア チャンツやインプットシートの言葉を使った。
 イ 友達や先生の使っている言葉の工夫や表現の工夫を参考にして、自分も使えるように努力した。
 ウ 最初はプリントから表現を探していたけど、最後には見ずに話すことができるようになった。「ことBANKメモ」に真似したい表現を見つけて書いた。
 エ 買い物をするときはどうしたら相手わかりやすいように話すことができるかを、先生たちの会話や友達の会話を通して学ぶことができた。

第6表のアでは帯活動から、イでは教員のモデルやゲーム内の生徒同士のやり取りから、またウやエでは段階的支援全体からの学びが見られ、段階的な支援がおおむね効果的に行われたと考えられる。

(2) 達成感や成功体験を得て有能感を高められたか
 達成感や成功体験については、ワークシートの自己評価の変容と、ワークシートの記述(単元後の振り返り)から分析した。



第5図 ワークシート 自己評価のまとめ (N=79)

ワークシートの自己評価では「『～がほしい』と伝えることができたか」、「値段をたずねたり、答えたりできたか」、「伝わる工夫ができたか」の3項目について、授業を重ねるごとに「できた」、「まあまあできた」と答えた生徒の割合が上昇した(第5図)。

また、到達目標を意識し練習することでできるようになったことがワークシートの記述から読み取れた(第7表)。

第7表 ワークシートの記述

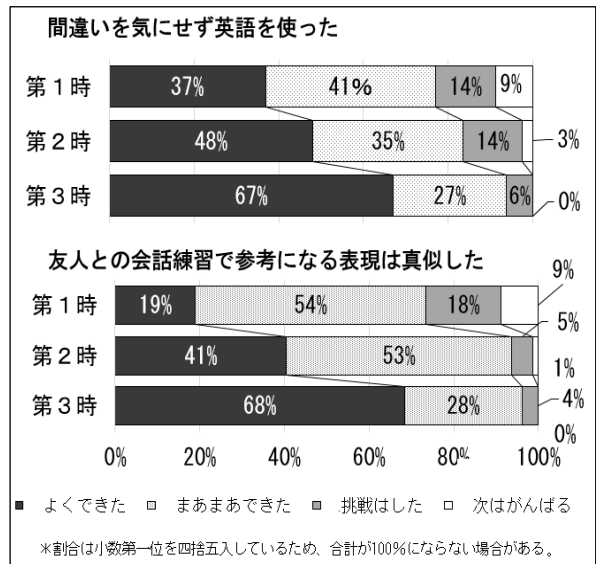
- ・今まで得られた知識(語句や言い回し)を活用することで、工夫して相手に伝えることができた
- ・最初は全く話せなかったけど、会話が普通にできるようになった
- ・始めの頃は間が空いたり、単語がでてこなかったりしたけど、最後はいろいろな表現が使えるようになった
- ・ジェスチャーなどを使ってわからない単語を相手に伝えることができた

これらのことから、生徒が達成感や成功体験を得ることができたと考える。

(3) 学習意欲が高められたか

ア ワークシートの自己評価

ワークシートの自己評価のうち、「間違いを気にせず英語を使った」、「仲間との会話表現で参考になる表現は真似した」の2項目について、第1時から第3時の回答は第6図のようになった。

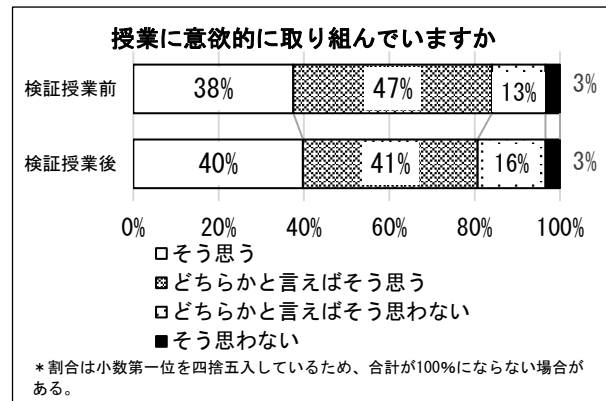


第6図 ワークシート 自己評価のまとめ(N=79)

2項目とも第3時には全ての生徒が「できた」、「まあまあできた」、「挑戦はした」のいずれかを選択しており、授業を重ねるごとに、英語を使おうとする気持ちが高まっていることが分かる。

イ 事前、事後アンケート

事前、事後アンケートで「英語の授業に意欲的に取り組んでいますか」という質問項目に対し、肯定的に回答した生徒の割合には、有意な変容が見られなかった(第7図)。



第7図 アンケート調査の結果② (N=88)

ウ ワークシートの記述

生徒の記述より、「英語を使ってみたい」、「英語ができるようになりたい」、「がんばりたい」という気持ちが高まっていることが分かる(第8表)。

第8表 ワークシートの記述

- ・もっと使える表現を知って使ってみたい
- ・今度は本当に英語で会話ができるようになりたい
- ・これからもこの単元で学んだことをもっと使っていきたい
- ・これから外国の人と関わるときに活用していきたい

全体としてはア、ウにより、学習意欲が高められたと考えられるが、イについては分析が必要である。

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 段階的な支援

段階的な支援については、第9表のような記述が見られた。

第9表 ワークシートの記述

- ・チャンツやインプット活動を活用して会話した
- ・友だちや先生の使っている言葉の工夫や表現の工夫を参考にして、どんどん真似して自分も使えるように努力した。友達が使っている表現を参考にしてたくさん使い、自分の表現のレパートリーや知識を増やして活用することができた
- ・ペアやグループ活動で参考になる表現をたくさん学ぶことができた

第9表の記述より、帯活動を通して、生徒が外国語活動で慣れ親しんだ表現や既習の表現を思い出し、教員のデモンストレーションで目標の共有をすることが効果的であったことが分かる。さらに、生徒同士で学んだことを「ことBANKメモ」に記入し、表現する機会を与えることで、外国語活動で学んだことを場面に応じて使い分け、発展的にいかすことができたことが分かり、段階的な支援が有効であったと言える。

(2) 達成感や成功体験

達成感や成功体験については、ワークシートで次のような記述が見られた。

- ・英語で聞かれてもわからなかったが、どんどんわかるようになってきて、自分でも言えるようになった
- ・最初は全く話せなかったけど、会話が普通になくなった
- ・英語ができない自分でも、楽しく、何回もやればできることがわかった

段階的な支援と共に、やり取りを繰り返させることで「できる」という達成感や成功体験を得させることができ、また、繰り返せばできるようになるという生徒の気付きがあったことも成果である。

(3) 学習意欲について

授業に意欲的に取り組んでいる理由として、単元後のアンケートに次のような記述があった。

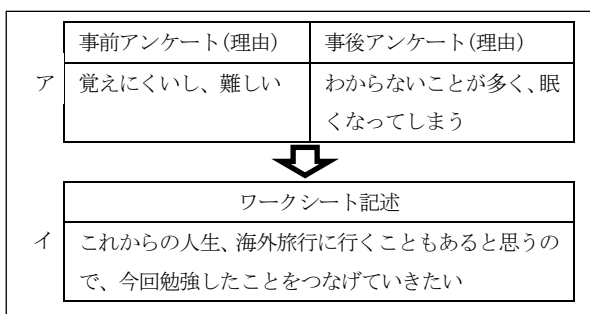
- ・グループの質問など、英語で言えたから
- ・いろいろな英語を学んで自分でも使えるようになるのが楽しいから

段階的な支援を受けながら、生徒が達成感や成功体験を得た結果、有能感が高まり学習意欲の向上につながるということがわかった。

2 課題と展望

(1) 課題

第7図のグラフからは大きな変容は見ることができなかった。第7図の質問項目に否定的な回答をした生徒Aは、授業に意欲的に取り組んでいるとは言えない理由を第8図アのように記述している。生徒Aと同様に否定的な回答をした生徒は、事前、事後アンケートとも「わからない」、「難しい」と理由を挙げている。



第8図 生徒Aの記述の変容

(2) 展望

ア 教員による肯定的な評価

第8図で示したように、生徒Aにはアンケート調査では授業に意欲的に取り組んでいる結果が見られなかったが、第8図イのように、学びを次にいかそうという意欲を読み取ることができる。このことから教員が生徒たちに「なぜ英語を学ぶのか」を考える機会や肯定的な評価を与え続けていくことで、このような生徒の学習意欲が高まっていくだろうと考える。

イ 段階的な支援の継続

第7図のグラフで、事後アンケートの「授業に意欲的に取り組んでいますか」という質問項目に否定的に回答した生徒は19%いたが、その全員が、ワークシート(単元後の振り返り)では「買い物の会話ができ」、「値段をたずねたり答えたりできた」など一定の達成感や成功体験を得られたという記述をしていた。これは、3時間という短い時間では学習意欲を高めるまでの十分な達成感や成功体験を得るまでには至らなかったためと考える。今後も段階的な支援を継続して実施することが必要であると言える。

ウ 外国語活動の経験をいかすこと

2020年度の小学校新学習指導要領実施に伴い、担任だけでなく英語専科教員やALTによる指導の導入が予想されるなど、小学校での英語指導は大きく変化すると考えられる。そのため、今以上に中学校教員は小学校教員と連携を取り、外国語活動での学びを把握し、生徒が小学校で学んできたことをいかせる授業を行う必要がある。

おわりに

本研究は、小学校で外国語活動を経験してきた生徒が、中学校でも「英語ができるようになりたい」、「英語を使ってみたい」、「がんばりたい」という気持ちを持ち続けることのできる授業づくりの一例である。今後も、小学校での学びをより意識し、生徒が学んできたことをいかしていると実感を持てるような授業を実践し、生徒の学習意欲を高めていきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、多大なご協力をいただいた愛川町の教職員に深く感謝し結びとする。

引用文献

- 文部科学省 2017 「中学校学習指導要領解説外国語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf (2019年12月2日取得)
- 下山剛 編 1985 「学習意欲の見方・導き方」教育出版 p. 15
- 辰野千寿 2005 「最新 学習指導用語事典」教育出版 p. 113

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 2014 「中高生の英語学習に関する実態調査2014」
http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf (2019年5月9日取得)